

第1回小牧市新たな学校づくり推進計画検討委員会 会議録

日時：令和5年11月20日（月）午後2時00分～午後3時30分

場所：小牧市役所 本庁舎4階 404会議室

■出席者

【委員】（名簿順）

柴田 好章	名古屋大学教授
鈴木 賢一	名古屋市立大学特任教授
大村 恵	愛知教育大学教授
加藤 和昭	味岡小学校長
塚本 真也	光ヶ丘中学校長
古木 啓介	小中学校 PTA 連絡協議会委員（一色小学校 P T A 会長）
武田 冴香	小中学校 PTA 連絡協議会委員（小牧西中学校 P T A 家庭教育委員）
越智 健一	小牧市区長会連合副会長 [北里]

【事務局】

中川 宣芳	教育長
伊藤 京子	教育部長
矢本 博士	教育部次長
丸藤 卓也	教育総務課長
長谷川 真	学校教育課指導主事兼主幹兼教育総務課主幹
采女 隆一	学校教育課管理指導主事兼主幹
鈴木 久代	学校教育課指導主事兼主幹
遠山 史織	教育総務課庶務係長
稲垣 翔太	教育総務課庶務係主事

■欠席者

横山 幸司	滋賀大学教授
-------	--------

■傍聴者

なし

■配布資料

- 資料1 小牧市新たな学校づくり推進計画検討委員会設置要綱
- 資料2 小牧市新たな学校づくり推進計画検討委員会名簿・座席表
- 資料3 小牧市新たな学校づくり推進計画の策定について
- 資料4 計画（案）「策定の趣旨」「小牧市の現状と課題」
- 資料5 新たな学校づくりに関するアンケート（案）

■会議内容

1 開会

2 会議の公開について

- ・事務局より本会議は公開とする旨説明があった。

3 委員委嘱

- ・事務局より委嘱状を交付した。

4 教育長あいさつ

【中川教育長】

本日は、お忙しい中、小牧市新たな学校づくり推進計画検討委員会にお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。

また、皆様には、日頃より小牧市の教育行政に対しまして、ご尽力をいただいておりますことに感謝を申し上げます。

さて、社会が急速に変化し、学校を取り巻く課題が多様化・複雑化していく中、小牧市教育委員会では、子どもたちが「予測困難」と言われるこれからの時代を生き抜いていけるよう、学校ならではの児童生徒同士の学び合い、多様な他者と協働した探究的な学びなどを通じ、子どもたちの成長を支える学校づくりを日々行っています。

そのような中、本市における子どもの数は年々減少し、今後、さらに減少傾向が続くことが見込まれており、一部の学校では、児童生徒数が極めて少数になることに伴って、学校行事や部活動など、子どもたちの学ぶ場や活動する機会の保障に大きな影響を与える可能性があるかと危惧しております。

加えて、学校施設の老朽化も進んでおり、今後、その対応に多額の費用が見込まれ、市の財政を圧迫することが懸念されます。

小牧市教育委員会では、これらを喫緊の課題としてとらえ、子どもたちに充実した教育環境を整備するため、本市における学校施設の適正規模・適正配置や子どもたちにとってより望ましい教育環境の基本的な考え方を総合的に整理した計画を策定することといたしました。

本会議では、今後の教育環境の整備の指針となる計画についてご検討をいただき、より良い学校づくりへと結び付けてまいりたいと考えております。

本日は、よろしくお願いいたします。

5 委員紹介

- ・各委員より自己紹介が行われた。

6 委員長・委員長職務代理者選出

- ・塚本委員より柴田委員が委員長に推薦され、委員全員の同意を得て柴田委員が委員長に選出された。
- ・委員長より加藤委員が委員長職務代理者に指名された。

7 議題

(1) 新たな学校づくり推進計画の策定について

- ・事務局より資料3に基づき、計画策定の概要とスケジュールについて説明した。
- ・質疑応答での意見は無かった。

(2) 計画(案)

- ・事務局より資料4に基づき、計画(案)のうち、「策定の趣旨」「小牧市の現状と課題」について説明し、以下のような質疑応答を行った。

①資料4 P4～P12 「(1) 児童生徒数・学級数の推移及び推計」について

大村委員	全国的に子どもの数が減少するなか、愛知県では外国にルーツを持つ子どもたちが増加しているが、小牧市での現状と、今後をどのように予想されているか、教えていただきたい。
事務局	令和5年4月時点の外国人の児童生徒数は945人であり、近年はほとんど変わりなく一定の横ばい状態である。今後も同様の傾向が続くのではないかと考えている。
鈴木委員	桃花台ニュータウンの人口減少が激しいという説明だったが、小牧市全体の計画のなかで桃花台ニュータウンの定住人口を増やすなどの計画があれば教えていただきたい。
事務局	桃花台ニュータウンのある東部地区の人口増加、活性化については東部地区のまちづくりに関する施策を推進しており、できるだけ多くの方に定住していただく施策を進めているが、劇的に人口が増加していくことは本計画の児童生徒数の推計の中では見込んでいない。
鈴木委員	上位計画との関係で、公共施設のファシリティマネジメントのなかで教育施設

	をどうするかという話に繋がっているかと思うが、他の公共施設と教育施設の複合化、例えば、学校に親和性の高いような児童クラブ、児童館、図書館、公民館などとの複合化も視野に入れながら計画するのか、それとも教育施設に特化して計画していくのか、どのような考えか。
事務局	今後、学校施設を建設するときの公共施設の複合化の考えについてのお尋ねかと思うが、現在のところ将来的な計画は無いが、昨今建替えを計画している学校では基本的に児童クラブを学校施設内に複合して建替えをすることが多くなっている。
鈴木委員	地域ごとに事情も違うだろうし、児童クラブは視野に入っていて、その他がどうなるか分からないが、全体としてはそういったことも考えていくということではよいか。
事務局	今後計画を策定していくなかで、地区ごとの課題を整理する。地区ごとに課題が異なるので、そこで議論できたらと考えている。
加藤委員	小規模校の課題について、12ページに記載されていることはそのとおりだと思う。自分も以前、全学年が2学級の小規模校にいたが、近頃はトラブルを起こす児童、個別支援を必要とする児童が多くなった。2学級では、その子にとって良い教育を受けさせることができるのか考えたこともある。やはり、少しでも学級の数が多く、いろいろな人と接することが子どもにとって大切だと思う。また、教員についても、全学年2学級では、担任をどこに配置するのか校長としても悩むので、適正規模が望ましいと思う。今後、そうした課題を解消できる計画を立てられると良い。
塚本委員	小規模校の課題は、そのとおりだなと思う。現在の勤務校が小規模校で、過去に小規模の小学校に勤務していたこともあるが、加藤委員が言われたように、クラス数が少ないと関係性が濃くなりがちで、発達段階を考えたときに距離を置かせた方がよいと考える時期に、距離を置かせるのが難しい。校外学習では、1クラスを連れて行こうとすると、担任以外でもう1人引率が欲しいが手が足りない、こういったことが教育効果が下がるというように表現されるのかなと思う。また、運営面のところで教員への負担とあったが、産休・育休で教員数が少なくなるときに、補充者を見つけていくが、講師不足もある中で、もともとの母数が少ない中で欠けていく困り感はある。
古木委員	感想を含めてだが、令和4年の市内の出生数が870人という数に驚いた。小牧市は大きいほうだと感じていたし、住みやすいまち、子育て支援に取り組んでいる小牧市でさえ、これだけの人数しか生まれてこないんだと驚きを感じた。PTAの立場からは、役員の成り手が少なく、6年間で1度は引き受けてという条件がないと引き受けていただけないなか、できれば学校に慣れている高学年の保護者の方に引き受けて頂きたいが、もう既に1回やっているの、低学年の保護者がやっていき、そうすると高学年の保護者のやり手がい

	<p>なくなることから、もう誰もやり手がいないというエリアが出てくるなど、PTA の役員を選ぶのが難しくなっている。PTA の役員の人数を絞ってはという考えもあるが、学校の先生のお仕事も大変だと感じており、授業以外での仕事も増えているなかで、保護者として助けられればと思うが、小さな学校であればあるほど PTA を引き受けていただける方がいないということを感じているところである。一色小学校では、外国人が5分の1程度おり、100人ほどが外国人児童だが、保護者に情報が伝わりにくく、PTA に参加いただけない状況となっている。学校の規模が大きくなると、そのようなところも吸収できないように感じる。</p>
越智委員	<p>桃花台の篠岡、桃ヶ丘、光ヶ丘あたりの交通の便を良くして、人を集めることはできないか。住宅ができた時は良かったが、今は空き家になっている。ピーチライナーを壊しているが、年を取ったら、あれだけ坂があったら車が無いと生活できない、交通の便が良くなるようにしてもらえたら、1クラスになるようなことは無いのではないかな。春日井市まで行けるような交通手段など市の方で考えていただかないといけない。</p>
事務局	<p>ご意見ありがとうございます。東部地区の活性化については市として大事な課題となっており、活性化に向けた施策を推進している。今回の計画策定では、新しい学校の魅力を高め、教育環境を充実させていくという視点で進めていくが、東部地区の活性化と新しい学校の魅力づくりが相互に高め合って行ければいいと思っている。</p>
武田委員	<p>私の子どもたちも小規模校に通わせているが、この資料を見て初めて分かることばかりで驚いている。小規模校ならではの良いところもあるし、不便なところもあると思っている。</p>
柴田委員	<p>保護者や市民に知られていないことが多くあるということだと思う。</p>
大村委員	<p>12ページの小規模校の課題については、もう少し議論して頂きたいと思う。先ほど現場のことを伺って、なるほどということもあるが、クラス替えについては、毎年クラス替えをした方が良いという観念があるようだが、果たして本当にそうだろうか。子どもたちは、4月・5月に不安になっている。ここで友達を作らないと1年できないままだと。そういった状況があるのは毎年クラス替えを行っているからではないか。毎年クラス替えをするのが当たり前になってきたのは1990年代頃からで、以前は2年、3年続けてというクラス編成の考え方があったと思う。1年間のサイクルでみると、2学期の中頃からクラスが安定して学級を単位とした教育活動に取り組める。それがそのまま持ち上がると、子どもたちの関係性をもとにさらにいろいろな活動が可能であったと思う。90年代に毎年のクラス替えになったのは、おそらくいじめや学級崩壊の問題がきっかけで、クラス替えをしないと学級運営が大変であるという考えからだと思うが、いじめの問題や学級崩壊の問題にしても、</p>

	<p>クラス替えをすれば一時は問題が見えなくなるが、基本的な子どもと子どもの関係性、子どもと教員の信頼関係を作っていかないと、根本が解決するわけでない。真っ当な学級運営を考えていくとすれば、クラス替えに頼らない学級・学校を育てるという考えもあり、小規模校はクラス替えが難しいからだめだというのは早計かなと思う。ぜひご議論をお願いしたい。</p>
古木委員	<p>親としては、3クラスは欲しいなと思う。運動会でも勝った、負けたとなるが、中間がいると良いと思う。両極端で決着をつけるのではなく、どちらでもない、中間がある「3」という数はいいなと思う。子どもたちの関係性のなかでも、中間ができるようなクラス配置ができるといいと思う。いろんな話を聞くなかで、自分はボーイスカウトに関わっているが、子どもたちはいろんな大人と関わるのが良いと思っており、小規模校だと関わる先生の数も少なくなる。自分の子どもの話になるが、担任の先生も好きだけれど、音楽・理科など専科の先生と話すことでもっと学校が楽しくなるようで、そういう意味では、より多くの先生が配置されるよう、それなりの学校規模を適切に維持することが必要だと思う。</p>
柴田委員	<p>先ほどの大村委員の発言に関して、毎年のクラス替えの実態はどうだったか。</p>
加藤委員	<p>自分が子どもの時は5・6年が持ち上がりだったが、教員になってからは毎年クラス替えを行っている。子ども同士のトラブルも含めて、保護者との関係性、教員との関係性、教員同士の関係性もあり、4月にリセットし新たなスタートを切るということで、毎年クラス替えを行っている。大村委員がおっしゃるとおり、2年、3年かけて学級を作るというのも大切だと思うが、4月に新たなスタートを切ることが必要だと考えている。</p>
塚本委員	<p>中学校も毎年クラス替えを行っている。大村委員が言われることもそうだと思うが、両面があって、リセットを待って3月まで頑張ろうという子もいるかと思う。上手くいかない関係性を2年かけてなんとかと考えることもある。自分は教員になってから2年持ち上りを小学校の時に1回だけやったことがあるが、2年間を通してのやりがいがある一方で、問題が発生した場合を考えるとリスクの方が多いように感じる。</p>
大村委員	<p>今おっしゃられた、両面あるというのはその通りだと思う。ただ、学び合いということをやっている小牧市だからこそ、というのがあがる。毎年変わると、3月まで耐えればと考える子もでてくる。つまり、子どもたちは1年単位で友達関係を考えるようになり、喧嘩しても仲直りする必要がなくなる。我慢すれば変わるから、関係が崩れたときに、手間暇かけて苦労して関係を修復しようとしない。そういったことが1年のサイクルでは難しい。先ほどボーイスカウトの話がでたが、社会教育や学童保育では、かなり長期間見守ることができるので、喧嘩したり仲直りしたりという関係を育てることがで</p>

	きるので、学校の中でも少し長い目で関係性を育てるということをどこかでやらしてもらえないかと思う。
鈴木委員	建築を学ぶ学生に学校の設計をトレーニングさせるなかで、学生と話をする、いくら教室を開放的に作っても、隣の教室に行ってはいけないルールがあるということだった。これは、全国的にあるようで、見えないラインがあって、物理的な壁ではなく、ルールで決められているということだった。学校生活の子どもたちの関係性は緊張感があるのだなと感じた。
大村委員	それも 90 年代から始まったことだと思う。最初にその話を聞いたのは東京だったが、隣のクラスに行ってはいけない、他学年のフロアに行ってはいけない、なるべく子どもたちを学級の中に閉じ込めて他と交流をさせないことで、いじめなどがなく安全に暮らせるようにということだった。愛知県でも 90 年代に同じようになった。なるべく関係を切って管理するというのがその頃から出てきた。関わらせて、そこで指導するというふうに戻らないかなと思っている。
柴田委員	規模ということとともに、学級をどうとらえるのか、今後に生かしていければと思う。

②資料 4 P13～P19 「学校の設置状況」について

大村委員	17 ページの、中学校への進学先が分散することがなぜ起こるのか、また、進学先の中学校を選ぶことはできるのか、それとも住所で決まるのかを教えてください。
事務局	どうしてずれが生じてきたのかという経緯については、資料の 19 ページの中段あたりに記載しているが、本市のこれまでの学校建設が児童生徒数の増加に伴う学校施設の狭あい化に対応するために実施してきた経緯があり、児童生徒数の調整に重きが置かれた学校の新設であったため、小学校区と中学校区にずれが生じてきた。
大村委員	子どもの数が多くなってきた小学校の間に中学校をつくり、子どもたちを分けるということを前提につくられたということか。
事務局	お見込みのとおりである。また、進学先の中学校は選択できず、住所で決まっている。
越智委員	郷中区では、北里小学校と小牧南小学校が選択できたのではないか。
事務局	郷中一丁目の限定した地区で、小学校では北里小学校か小牧南小学校を選択できる。北里小学校を選択した児童は、中学校では北里中学校に進学し、小牧南小学校を選択した児童は、小牧中学校または応時中学校に進学する。これは「特例区」としての措置で、保護者からの申請が必要である。
古木委員	中学生が電車で通っているのは、どういうエリアで、どういう子どもか。

事務局	応時中学校で一部の生徒の電車通学を認めている。安全のことを考慮し、身体にも配慮したなかで、個別に通学手段を学校長で判断していくケースもある。
古木委員	電車代は家庭の負担か。
事務局	家庭の負担になる。
越智委員	小中学生を「こまくる」に乗せていくということとはできないのか。朝は特に利用している人が少なく、小学生が暑いなか 20 分・30 分も歩くのはかわいそうだ。また、児童を見守る交通ボランティアも大変なので、一括でバスはどうかと思う。
事務局	通学距離・通学手段については、今後、適正規模・適正配置を検討するなかでしっかり議論する必要があるため、資料として提出させていただいた。現状の通学距離は、2 km 未満が多い状況だが、一部で 2 km を越えており、夏の暑い時期に重いカバンで大変な思いをして通っている子どもがいることは承知しており、今後検討していかなければならないと考えている。今回の計画策定の中で、適正規模・適正配置について検討を行うが、仮に学校を統合した場合には通学距離が 4 km のところも出てくることから、安全に学校に通うにはどうすればいいのか、しっかり議論する必要がある、そのときに「こまくる」を使う案も出てくると思うので、計画策定の中で検討をお願いしたい。

③資料 4 P20～P22 「学校施設の状況」について

越智委員	震度 6 弱などの強い地震がきたときに、私は北里地区に住んでいるが 60 年も経っている建物のところに逃げるのが不安である。早急に建て替えて欲しい。
事務局	学校の建替えを早急にして欲しいというご意見だったと思う。長寿命化計画では目標耐用年数を 80 年と定めているが、仮に、既存の学校全てを目標耐用年数までに建替えを行うと、2 年に 1 校を建替えないといけない。これは、昭和 40 年代・50 年代に一気に建築しており、同じ時期に耐用年数がくるためであるが、一方で、市の財政は厳しい状況が続いており、今後どのように建築していくのかはしっかり議論しなければならないと考える。ただ、災害時の避難所である学校の維持管理はしっかりやっていたらいいとけない。
柴田委員	耐震は終わっているということで良いか。
事務局	終わっている。
鈴木委員	通学区域が複雑なため小中一貫教育が難しい状況だが、小学校同士の統合は考えやすいと思うが、中学校も絡めた統合のあり方も骨子案に入ってくるのか、地域の意向などもあり簡単ではないと思うが、そのような可能性

	も見つつということはあるのか。
事務局	今回は現状と課題の整理であったが、次回以降、これから子どもが減っていくなか、子どもたちにとってより良い教育とは何かが今後の議論であり、そのなかで、小中一貫教育も議論に入れて行きたいと思っている。
鈴木委員	財源の話だが、お金の話だけでいうと各校にプールを作らないという選択もある。また、建築の発注方式で、民間にお手伝いいただくというのもある。先の話かもしれないが、そういうことも議論の中に入ってくるのか。
事務局	この計画では、どのように建設していくかまでは踏み込まない。まずは、子どもたちにとって望ましい教育のあり方が議論の中心になる。なお、今あった今後プールをどうしていくのかについては、本計画で決めていくことはないが、民間委託等の手法は承知しており、議論しているところである。

(3) アンケート調査について

- ・事務局より資料5に基づき、「新たな学校づくりに関するアンケート（案）」について説明し、以下のような質疑応答を行った。

柴田委員	質問3の3番に習熟度別指導の記載があるが、小牧市では習熟度別指導を行っているのか。
事務局	行っていない。
柴田委員	習熟度別指導をしていないなかでは、学び合う学びをたくさん行っている「グループ学習」と同じ設問だと答えにくいのかなと思う。
鈴木委員	質問7のあたりで、特別な支援が必要な子どもたちの保護者からの期待感を聞いて、声をあげにくい方たちの意見を引き出していただくとありがたい。また、質問8のなかで、教職員の職場環境整備について、学校の先生になりたいがらないのは労働時間だけでなく環境もあると思うので、設問に入れていただくと良い。
事務局	いただいた意見については、今後の実施に向けて検討させていただく。
大村委員	質問8の11番に、「地域の方が使えるスペースの充実」とあるが、おそらく専用を使うというイメージだと思うが、共用で使うというイメージはあるか。図書室、家庭科室といった特別教室を地域に開放する、共有するというのがイメージできるような選択肢になると良い。また、現在のものは大人向けの調査なので、今年4月からのこども基本法に照らしてみると、子どもに関わる重要なことは子どもに聞くということになっており、学校づくりはこどもにとって重要なことなので、子どもに意見を聞いてもらいたいと思う。どの学年に聞くかはお考えいただいて、小学生は回答が難し

	いかかもしれないが、小学生も経験してきた中学生に聞くのは重要なことだと思うので検討いただきたい。
古木委員	アンケートの対象者に外国人は含まれるのか。一色小学校では外国人が多いので、外国人の考えを伺えるように考えていただけるとありがたい。
事務局	アンケートは WEB 方式でやりたいと考えており、対象者に外国人も入るが、日本語を上手く理解できない保護者さんもいるので、どのようにサポートするかなどご意見を参考にさせていただきたい。

8 閉会

- ・次回の第2回検討委員会は、令和5年12月18日（月）午後2時に小牧市役所本庁舎3階301会議室で実施予定。